

# 多様性を活かす 組織の必須トレーニング

報告



～無意識の思い込みをなくし、職場の活性化をめざす～

《日時》令和5年3月9日(木)

《講師》株式会社レガート 代表取締役 玉井 幸江 さん

この講座はワークショップを中心に進められました。

会場・Zoom共にグループに分かれて参加者同士で話す機会が設けられ、参加者からご好評の声をたくさんいただきました。

## 《プロフィール》

1984年に日本航空に入社。国内・国際線客室乗務員として約7年間勤務。

2004年からは企業の人材育成に携わり、研修講師として官公庁、一部上場企業、愛媛県内中小企業向けに多数登壇。

その他、愛媛県職業能力開発協会キャリア形成サポーターとして、約3年間、企業の従業員に対し、年間約100名のキャリアコンサルティングを実施。また、松山大学非常勤講師を務めた。

2020年9月に株式会社レガートを創業し、現在、愛媛6次産業化サポートセンター企画推進員や、愛媛県職業能力開発協会コーディネータとしても活躍中。

Works175～

女性活躍推進から、  
ジェンダー平等へ

本講座で紹介された『Works175～女性活躍推進から、ジェンダー平等へ』は無料で閲覧できます。「アンコンシャスバイアス」や「ジェンダーギャップ」について特集されていますので、ぜひ、二次元コードを読み取ってご覧ください。



## 参加者の感想

アンコンシャスバイアスを無くしていくために、どうすべきかを具体的に知ることができた。(20代/女性)

グループワークをすることで気づけることがあった。話し合う中で、何気なくジェンダーバイアスになる言葉があったと気づけた。(30代/女性)

同じ課題について他の方の意見を聞いた。(40代/男性)

自分の無意識を意識した。(50代/男性)

意識改革をしていくことが大切だと思った。(60代/男性)

自分で気づいていかなければいけないと、問題意識を強く持った。(70代以上/女性)

# 講 義 内 容



『ジェンダーバイアスワークショップ to our future 無意識の思い込みに気づいて人間関係を改善!』というワークショップのプログラムの下、「ジェンダー・バイアス」を通して「アンコンシャス・バイアス」への気づきや、その気づきを組織の中でどう生かせるか、玉井さんにお話をいただきました。

## 《ワークショップの目的》

- ◆ アンコンシャス・バイアスやジェンダー・バイアスについて理解し、身近な存在だと認識する。
- ◆ 社会に根強く残る「ジェンダー・バイアス」について、自分ごととして捉えられるようにする。
- ◆ アンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み）が周囲にどのような影響をもたらすか考える。また、組織に及ぼす影響を理解する。
- ◆ 自分の中にある「ジェンダー・バイアス」に気づき、改善するには何ができるかアクションを考える。

玉井先生



## 男女の役割分担について

「男は仕事」「女は家庭」という考え方は現在も根強く残っている。男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ、育児中の女性は重要な仕事をするべきではない、という考え方をしている人、または、そのように感じた経験があるという人は多い。

男女で役割を分けることにより、「これは男性が得意なものだから、女性の自分では男性のようにこなせないのではないか」と感じてしまい、自己肯定感が下がってしまうというような弊害を招いてしまうこともある。

男女で役割を分けるのではなく、個人の得手不得手、それぞれの適性に合わせた役割を担うことが大切だ。

## ジェンダーギャップ指数2022年

世界各国の男女格差を表すジェンダーギャップ指数で、日本は146ヶ国中、116位だった。世界的にも遅れているのが現状だ。日本は男女格差を埋めるための対策として、女性が活躍できるようにするための施策を講じているが、実は世界基準とは異なっている。

世界の潮流は「1人1人が尊重されて活躍できる社会にしていこう」というものであり、女性にフォーカスしてジェンダー平等を実現していこうという方向性ではないのだ。

## ジェンダー・バイアスを無くすために

ジェンダー・バイアスを無くすために、私たちはどんな行動とればよいのだろうか。

何気なく使っている言葉にジェンダー・バイアスを含むものがある。「普通は〇〇だ」「こうすべき」など根拠はないはずなのに、断定する言葉を使っている人も多いだろう。自分が使う言葉に気をつけること、相手がそのような言葉を使った場合は気づきを促す言葉がけをすることが必要だ。

ジェンダー・バイアスがかかった発言をする人に遭遇した時、その場面を見て見ぬふりをしたり、笑ったり、沈黙したりすることは、その発言者を支持してしまうことになる。また、何も言わないことは肯定していることと同じだ。そのため、発言を受けた側を擁護し、支援することがジェンダー・バイアスを無くしていく手助けになる。

私たち1人1人が適切な発言、行動をすることで、意識が変わり、ジェンダー・バイアスを無くすことにつながるだろう。

講義の様子



グループワークの様子

